

遺書

わが亡きあとに

市銀事件

人権は甦よみがえれ

平沢貞通

著

森川哲郎

解説

発行 現代史出版会

発売 徳間書店

人権は甦よみがえれ



まことある至誠磨き
弥情き米寿迎ふ
今日も嬉しき

著

解説

発行現代史出版会

発売 徳間書店

光緒

平沢貞通（ひらさわ・さだみち）

1892年東京都に生まれる。

18歳で第1回二科展に入選，小樽中学卒業後，
画壇に登場。1932年，帝展・文展無鑑査となり，
テンペラ画会会長。

1948年8月，帝銀事件犯人の容疑を受け逮捕，

1955年5月死刑確定，現在に至る。

森川哲郎（もりかわ・てつろう）

1924年東京都に生まれる。

早大・日大中退後，編集者・記者を経て，文筆
業に入る。

著書『帝銀事件』『獄中一万日』『拷問』『日本
死刑史』『日本の黒幕』『日本疑獄史』など多数
がある。

遺書 帝銀事件

わが亡きあとに人権は甦えれ

著者 平沢貞通

解説 森川哲郎

発行日 昭和五十四年四月十日 初版発行
昭和五十四年六月一日 二刷

発行者 徳間康快

印刷所 ミツワ印刷(株)・真生印刷

製本所 ナショナル製本

発行所 株式会社 現代史出版会

東京都港区新橋三・一〇九 第五兼坂ビル

郵便番号 一〇五

電話 (〇三)四三一・二二四九

発売 株式会社 徳間書店

東京都港区新橋四・一〇一 郵便番号 一〇五

電話 (〇三)四三三・六二三一(代)

振替 東京四・四四三九二

『遺書 帝銀事件』によせて

三十一年前の帝銀事件について、ひとつはっきりおぼえていることがある。それは、毒をのまされて倒れたなかのひとりの女性が、容疑者とされた平沢貞通氏と面会したあとで、この人ではないように思うと証言したことだ。

警察がこの人だろうと言うのに対して、自分のうたがいを保留するのは、むずかしいことなのに、よくそれをあえてしたという感動だった。

それから何年もたって、私は、平沢貞通氏を救う会のことを知らされた。平沢氏の冤罪を信じる人があつまって、獄中の平沢氏をばげましつづけているという。そのたまり場の一つとなったスナック・バーのバーテンダーは、もと拳闘選手で、自分の考えに共感をもつ女性と結婚し、その結婚式には、獄中の平沢氏に仲人になつてもらったという。

こういう心のかたむけかたは、その人たちの一身にかかわることであり、相当の罰を覚悟せざるを得ない。事実、この会の事務局長となった森川哲郎氏は、さまざまな生活上の苦しみをなめた。しか

し、重病に苦しみながら、森川氏の表情には、私心をはなれた仕事に打ちこんでいる者のさわやかさがあり、それよりもおどろくべきことに私が感じられたのは、森川夫人、森川氏の息子さん（娘さんにはまだ会っていない）に、おなじさわやかさと明るさが共有されていることだった。

その後、私は、「十二人の怒れる男」というアメリカ映画を見て、死刑宣告寸前の容疑者に陪審の一人がうたがいをさしはさみ、それが他の十一人に波及してゆく劇に感心した。これはアメリカだからあり得ることだと思ひそうにもなったが、しかし、この映画のできるよりも前に、帝銀事件の犠牲者の一人は警察の判断にうたがいをさしたのであり、この事件と何のかかわりもない何人もの人びとがあいよって、長期にわたる異議申したてを日本でつづけてきたのだった。

帝銀事件は、占領下の犯罪である。その捜査には幾つもの壁があった。とらえられた平沢氏は、一カ月とじこめられた後に、一度目白したが、その後無実を主張して、その主張を三十年にわたってかえていない。獄中で平沢氏のかきつづける画は、この世の権力にゆずるところのない平沢氏自身の立場から見た一つの天地を示しつづける。この人はすでに八十八歳をむかえた。

森川哲郎氏に動かされ、森川さん一家のあとを歩む一人として、平沢氏の長寿とその釈放を希望する。

一九七九年三月二日

鶴見俊輔

遺書 帝銀事件／目次

『遺書 帝銀事件』によせて

鶴見俊輔……………Ⅰ

序 章

〈帝銀事件〉と平沢遺書について……………Ⅱ

事件の発生……………Ⅲ

拘禁病と自供の間……………Ⅵ

毒物の操作に熟練していた犯人……………Ⅸ

G H Qと読売新聞……………Ⅻ

アリバイ……………Ⅻ

毒物……………Ⅻ

調書偽造……………Ⅻ

無実を証す執念の中で死す……………Ⅻ

宗教への傾斜……………Ⅻ

涙もかれて……………Ⅻ

第一章 遺書Ⅰ

私は事件を起していない……………Ⅻ

私のアリバイと取調べ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

この書をもって遺言とする／私にはアリバイ
があったのだ／証言

事件前金に困っていなかった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

家も建って、幸福目前の時に／「松井名刺」
が運命を変える／これがあるのさまの「松井
氏との邂逅」

私の指紋は銀行に残されていた指紋と違う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

今なお残る謎の指紋／裁判官も見落とす

私は逮捕状もなく、わなにかけられて捕えられた・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

再びやってきた刑事は言った／一人合点ばか
りの捜査陣

炎暑下十五時間、水一滴も飲ませず護送・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

すべて、権柄づくだった捜査官／炎熱地獄の
十五時間

真犯人扱いの取調べ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

殺してもいいヤツなんだ

自殺しようとしたわけと精神的拷問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

高木検事と最初の自殺未遂／この痔の薬で死ぬ／肉親の悲しみを持ち出して精神的拷問を加える／毒物の出所追及と「聴取書の偽造」
この真犯人が憎い……………75

左頬傷あとについての証言／成智警部補が追った真犯人／「平沢では絶対できない事件」
／検事は殺人予備罪／平沢帝銀事件会館設立の遺志

第二章 遺書Ⅱ

この事実を遺書に添付します……………95

帝銀事件と生体実験工場……………96

人間モルモット／特命極秘捜査／死体を残すな／マルタは号泣する／マルタ捜査／あなたは虐殺者だ／あなたを抹殺する／真犯人は七三ーだ！／成智捜査報告書

国会法務委員会に於ける帝銀事件追及……………115

平沢は真犯人か／国務大臣回答／平沢を政治的に扱うな／抜き打ち処刑はしない／参照Ⅰ
Ⅱ帝銀事件平沢貞通氏の再審請求の理由を明らかにする／歴史的記録としての平沢遺書

第三章 遺書Ⅲ&獄中記

わが絵、わが愛、わが生涯……………

133

画家としての平沢……………

134

平沢の出生の環境／大正年間に月三百円の高
収入……………

生い立ちから画歴……………

137

辛いな人生でした／第一回二科展入選作「昆
布干すアイヌ」／画論Ⅱテンペラ画論／作家
有島武郎との交友／横山大観との出会いと別
れ／米人の崇拜者にあてた手紙……………

初恋の記……………

148

脳裏をめぐる初恋……………／軀落ちして得た妻／
思い出す長女出産の時……………

妻子への慕情……………

155

妻子への迫害／妻への感謝とわび……………

小樽慕情……………

159

幻のとき恋人／三々九度……………

小樽を描く若き日の平沢氏……………

165

運命の大病コルサコフ氏病と妻の献身	168
-------------------	-----

悲しみを背負って／悲劇の序章／精神鑑定による論争と白木説

獄中の生活と心境	180
----------	-----

死刑の上に無期刑二回／平沢貞通の一日／時の流れがわかりませんで／牛乳洗顔法

第四章 獄中書簡

「救う会」の人びと	193
-----------	-----

死と対決する一万一千日	194
-------------	-----

この章について／内海突破氏の激励／「しゃばで」という挨拶

大野伴睦氏を命父と呼ぶ	200
-------------	-----

小菅の「同期の仲間」／私は命父をなくした

赤松勇議員の真情	204
----------	-----

強烈な人権意識／ついに仙台へ移監される／志賀氏、神山氏を動かす

森川と平沢貞通氏	210
----------	-----

執行命令と同時に舌を噛み切る

松本清張氏の差入れたレモン

赤松―大野ライン

大物二人が手を取り合う／赤松先生のいる法務委員会に出たい／赤松議員の追及と神山氏の手紙

民事訴訟でたたかった人たち

議員、超党派で平沢氏を支持する／小見山登氏の尽力と熊井啓監督の訪問／平沢氏を励ます人びと

やさしい平沢

森川の弾圧逮捕後、息子にあてて／高橋英吉氏（自民党幹部）も救援に積極的

神近市子氏と猪俣浩三氏らの努力

戦後死刑囚特赦に向けて／霧はれて……／平沢にまだ特赦はこず

元帝銀事件特命捜査主任の活躍

森川の病中入所を悲しんで／あなたの子息の病気に代って／『昭和史の証言』の反響

239

233

228

222

218 216

心あたたまる真情の支援者

243

清水千尋氏の二十四年の誠意／夫人の訪問着
を描きたい

平沢氏危篤に陥る

245

死刑執行の嵐の中で／義歯の入らない特異体
質／『画集』できる／出所したらまず父の墓
詣でに

第五章 獄中歌

わが亡きあとに人権は甦えれ

253

悪魔となった権力に

254

獄窓に綴った抵抗歌／独房住人平沢貞通／比
類ない魂の記録／妻恋し、子、孫恋し／この
心を誰が知る

解説者あとがき 獄中一万一千百五十日

274

道

言

平沢は通に帝銀事件犯人でない

「其証拠」

帝銀事件全般にわたり、《非犯人に犯罪無し》
が根本的証拠であります。「其証拠」は、

一、帝銀事件時刻、平沢の所在が五人の証人に
拠つて証明されている「アリバイ」が実です。
即ち二十六日午後二時十五分から四時三十分
少し前迄の平沢の所在は立証されているので
す。《其二十六日午後二時十分少し過、平沢は
九、内船船運管会に次女の背山

序章

へ帝銀事件と平沢遺書について

事件をはじめて読む方に

帝銀事件という名は、いまではかなり多くの人の頭の中に刻みこまれている。その死刑囚平沢貞通の名も、きわめて有名で、彼はあるいはシロなのではないかという疑いのあることも、同様に広く知られている。

しかし、具体的に、帝銀事件の問題点、あるいは平沢シロ説の根拠となると、明白に答え得る人がどれだけいるだろうか？

私の著書『帝銀事件』『獄中一万日』、あるいは、松本清張氏の『小説帝銀事件』などを読まれた人、また、日活映画「帝銀事件死刑囚」を見た方たちは、問題点に精通しているよう。

そういう人たちのためには、くり返して解説する必要もないほどだが、この遺書を通して、はじめて「帝銀事件」にふれる人もあると思うので、事件の内容、平沢シロ説の問題点などに、ふれておかなければならない。

ただし、紙数の関係もあって、詳細につくすことができないので、詳しく知りたい人たちは、前掲の書を見てもらいたい。

現代で、数多く生起している問題ある裁判、人権問題の中で、必ず後世に語り伝えられる特筆される大事件だけに、この事件を詳しく知っておくことは、決して無意味でないと思う。

事の順序として、事件の発生にさかのぼる。いま三十歳の人が、まだ生れたばかりの頃である。

事件の発生

昭和二十三年一月二十六日、午後三時を少し過ぎた時刻であった。

前々日から天候が悪く、かなりの量の雨が降り、その日は朝から、みぞれまじりの小雪が降って、午ごろにはやんでいた。

現場は、有名なぬかるみ道で、ひどい時は靴のかかとを没したという。

そのひどさについては、江戸川乱歩の小説にも出てくるといふ、現場近くに住む、春近堂、書店の主人の証言である。

終戦から、まだ二年半もたたない東京では、廃墟と闇市が、全市にひろがり、虚脱と混乱の中に、占領軍とパンパンとやくざとテヤヤと、その上前をハネ、共謀になった警察官と、赤旗とデモとが交錯した異様な混沌の中にあった。

誰もが、その日その日の食糧と現金に追われていたところである。

当時の本を読むと、

「警察官は、事件の捜査にかこつけて、闇物資の買い出しに行っている状況だ」と素っ破ぬかれている。

そうした中で、人の心を寒くするような忌わしい事件が、続発していた。

小平義雄事件、^{じしやき}壽産院事件、炭管疑獄、二・一ゼネストの挫折等々……………。

また、水害や台風の被害が多く、伝染病も各地で発生していた。

そうした情勢の中で、事件が発生した。

都心池袋から西武線で一つ目の駅、椎名町を下車して、わずか数十メートルの距離にある帝国銀行椎名町支店。

五十七坪の質屋を改造したささやかな銀行である。現場は、長崎神社の前の角地で、住宅街と商店街の別れ目である。

三時に閉店になって、それから間もなくの時刻であった。右腕に東京都のマークの入った「消毒班」の腕章をきりりとつけた四十歳の男が現れた。

「長崎二丁目に住む相田さんという方の共同井戸から集団赤痢が発生しました。

その家の者が、今日ここに預金に來ています。いま進駐軍がその家を検疫中です。間もなくここに来て、店を残らず消毒しなければなりません、その前に、行員のみなさんに消毒薬を飲ませておいてくれといわれてきました」

一語一語、落ちついた歯切れのよい言葉でものをいった。いかにも手馴れた、熟練した医者をおわせる風態の男だった。

支店長は、疑いを入れず、中に招じ入れた。男は、玉のついた短いスポイトのようなもの——短型駒込型ビペット——で、薬を二回ずつ、約五CCずつ十七個の湯のみにつぎ分け、十六人の行員を集めて、「自分がするように飲んで下さい」